

北海道の「空」資源



(社)北海道スカイスports協会副会長

板倉 忠興

今年、ライト兄弟が人類初の原動機付飛行機による飛行に成功してからちょうど100年目にあたります。

鳥のように空を飛んで見たいという思いは大むかしも変わらなかったようで、紀元前2300年の古代エジプトの出土品の中に、現在の飛行機と非常に良く似た形のもの（翼幅18cm、イチジク材製）があることが知られています。わが国では、実際に飛揚はできませんでしたが二宮忠八の甲虫型飛行機（1894年）が知られています。



古代エジプト出土品（筆者による模写）

スカイスportsのすすめ

自然とのふれあいや体験を求める動きは年々高まり、余暇・レジャーにおいてもアウトドア活動が普及・進展しています。とりわけ北海道では豊かな自然をフィールドとしたさまざまなアウトドアスポーツが活発に行われ、その活動の場も陸のみならず海、そして空へと広がりを見せています。

中でもスカイスportsにおいては北海道が全国一の「空」資源を有していることから、スカイスportsを核として地域の活性化に取り組む自治体

も多く、現在31の市町村がこれに参画しています。

一昨年の9.11テロ事件、最近ではSARSなど、このところ海外旅行は敬遠ぎみで、人々の志向はいわゆる「安・近・短」に向かっているようです。

この際、少しだけ視点を変え、アソビの中に垂直方向の次元をひとつ加えた3次元のアソビを考えて見るのもひとつの方法でしょう。わずかに次元がひとつ増えただけですが、目の前に今までとはまったく違った世界が展開されます。

北海道には全国で唯一、空のアソビを支援する「(社)北海道スカイスports協会(HOSPA)」が1990年に設立され、今年で14年目を迎えます。北海道の雄大な自然を生かしスカイスportsの啓蒙・普及などを目標として諸活動を展開しています。

また、これら空のアソビが一堂に会する「スカイスportsフェア」が毎年道内のどこかで開催され、見てまたは触れて実際にスカイスportsを体験することができるようになってきました。写真は昨年当麻町で開催されたときのものです。本年は9月に白老町で開催されます。

スカイスportsのいろいろ

スカイスportsには比較的簡単なものから本格的なものまで多くの種目がありますが、次に代表的ないくつかをご紹介します。

○パラグライダー

布製のパラシュートと細いロープだけの極めてシンプルな構造で山の斜面を駆け下ります。浮くだけなら1～2日の練習でOK。いくつかの目標の上を通過してゴールするスピード競技が主流。最近では平地からでも離陸できるエンジン付も人気上昇中です。

○ハンググライダー

パラシュートよりは硬い布製の翼に身体を吊し、体重を前後左右に移動させながら空を舞います。競技では滞空時間や着地の正確さ、3地点を回るスピードなどを競い、目的地点への野外距離飛行もあります。

○超軽量動力機（マイクロライトプレーン）

エンジンをもち、ハンググライダーよりも自由度が高く、飛行機よりも小回りが効きます。体重の移動で操縦する極めて単純なものから、一見ほとんど飛行機に近いものまで多くの種類があります。競技では主として旋回や着陸の飛行技量の正確さを競います。



2002スカイスポーツフェスティバルとうま

○滑空機（グライダー）

固定した翼を持つ航空機で、飛行機あるいはウインチのワイヤーに引かれて離陸します。初期の頃はゴムひもでパチンコのように射出されていた飛行機の原点です。エンジンがありませんので、上昇気流が頼りですが、世界記録はアンデス山脈での3,000km距離飛行、わが国でも1,000kmの記録があります。最近はエンジンを付けたモーターグライダーも人気があります。

○熱気球（ホットエアバルーン）

人類が最初に空へ舞い上がった装置で、最初の飛行はライト兄弟よりもさらに100年以上も前の18世紀末です。ガスバーナーを調節し、行きたい方向の風をつかまえて飛行します。競技は、気球の鬼ごっこのようなもの、目的地への飛行と着陸の正確さを競うもの、野外距離飛行などで、太平洋横断の記録もあります。

○落下傘（スカイダイビング）

唯一落下を楽しむ競技で、上空へ飛び出してからパラシュートを開くまでの1分間勝負です。団体での幾何学的飛型、目標地点への着陸精度などを競い、宙返りもできます。女性の間でも人気

が高く、日本落下傘スポーツ連盟の理事長は、HOSPAsの理事でもある女優の応蘭芳さんです。

○ラジオコントロールエアプレーン

無線操縦の模型飛行機で非常に多くの種目があります。最近では模型のジェットエンジンもあり、遠くから見ると姿かたち・音などは本物の飛行機と区別がつかないほどです。本物の飛行機ではできないアクロバット飛行も可能です。

○紙飛行機（ペーパープレーン）

折り紙のヒコーキが原点です。腕力で空中へ投げかけるかゴムで射出させます。丈夫で軽くかつ空気力学的にも優れたもの、一方で非常に奇抜なアイデアも可能で極めて知的な競技です。国際大会におけるわが国のレベルはトップクラスです。

○スポーツカイト

やっこ凧が原点ですが現在のスポーツカイトはまったく別物といってもよいもので、風に負けないパワーと繊細な操縦技術が必要です。複数の糸を巧みにあやつり音楽に合わせて優雅に、ときには時速100kmにもおよぶダイナミックな飛行も可能です。競技では個人または団体に規定あるいは自由の演技を競います。

誰でもが参加できるアソビに

今やスカイスポーツは一部マニアのアソビではなく、誰でもが容易に参加できるアソビになってきました。また、自分で飛び上がらなくても、模型の飛行機や最近小中学生の間で人気上昇中のペットボトル・ロケットなどを「飛ばす」楽しみもあります。

まずはぜひ一度下記のホームページを訪問されることをお奨めいたします。

(社)北海道スカイスポーツ協会のホームページ
<http://www11.ocn.ne.jp/~hospa/>

参考文献

テイラー他『ギネスブック飛行機—歴史と記録の大本』講談社（1978）／北海道スカイスポーツ協会『HOSPAs長期ビジョン～スカイスポーツのメッカ形成をめざして～』（1996）／北海道スカイスポーツ協会『2003スカイスポーツフェスティバル北海道』（2003）

■プロフィール■

板倉 忠興（いたくら ただおき）／1937年生まれ。1960年北海道大学工学部卒業、同講師、助教授、教授（河川工学）を経て2001年退職。その間4年間北海道開発局勤務。2001年から㈱リブテック勤務。現在取締役会長。北海道大学名誉教授。北海道大学体育会航空部創設時より顧問として指導に当たる。(株)日本滑空協会理事、(社)北海道スカイスポーツ協会副会長。自家用操縦士、二等航空整備士、航空無線通信士。